第 65 回　社会に旅立つ君に

21 世紀の今日の世界には、地球温暖化の影響による自然界変化の諸問題や人口問題、政治や経済などの多くの複雑かつ緊迫した難問題、人種や宗教上の問題、人道上の問題、等々と多種多様に多くの問題が山積しており、人間が生きていくうえでこれまでよりも厳しい環境にある。当然、世界のなかの小国日本にも多かれ少なかれ同様にそれらの問題の影響が及んでいる。

わが国においては現在、少子高齢化という人口構造の変化の影響がとくに目立っている。そのため、国民が安心・安全で豊かな生活を営むための社会の重要な基盤を構成する生活に必要な多くの因子レベルが低下してきている。人口構造の変化に伴なう深刻な労働者不足と、それを補うかのように発展してきた生産の合理化・機械化、流通機能の進歩などは、安定な経済生活が容易となった現在の若者の正常な勤労意欲にも影響を及ぼしている。精神的にゆがみのない若者が多く現れるのが望まれていることも現在のわが国社会の一面である。若者に限ったことではないにしても、一般的に倫理性に乏しく周囲のことに関心が低いような人道上問題のある人間が近年増えてきたと思うがどうであろうか。

さて、春は若者にとってそれぞれが選択した一連の学校教育が終了する時期である。いうまでもなくわが国では、義務教育課の修了後高校学校に進学したもののなかで多くは、その卒業後さらに各種学校・専門学校・短期大学や大学などに進学する。義務教育から大学教育までのそれぞれの教育時期終了後に生涯の進む道が明らかになってくる。

わが国の就学から受身の教育終了までの一般的な流れを述べたが、ここでは、筆者がこれまで8年間関与してきた短期大学を中心に考えてみたい。

日本の現在の大学教育が直面している問題は、ひとつにわが国の少子化に起因する問題がある。近年わが国の大学や短大の高等教育機関の増加により、一部の有名大学を除いて定員割れがおこり、それを防止するために学力入学試験レベルを下げて合格率上昇をはかることや、そのほかの入試条件を緩和するなどの対策が講じる大学などが多くなった。その結果当然のことながら大学生の学力は低下する。学力低下のほかにも大学が直面している現在の問題は、高等教育機関に対する公的援助金が他の国々よりも目立って低いこと、高等教育機関における職業訓練の機会が一定のレベルでなく、卒業後の関係企業に任されていることが多いこと、などがある。さらに卒業後は自由と気楽さ志向で、所謂フリーターとなって働くことが好まれていないことも問題のひとつである。

現在筆者が所属しているような短期大学においても同様な問題があると思われるが、ここではその修学意義を含めて肯定的に考えてみたい。

わが国の短期大学は、学校教育法第 100 条第1項・同第2項に「深く専門の学芸を教授研究し、職業又は実際生活に必要な能力を育成する」ことを目的とする、と規定されており、中等教育修了者を対象とした修業年限が 3 年以下の教育機関である。短期大学は、省略して短大、また大学の短期大学部も省略して短大部と表現される。

現在大学全入時代といわれるほど4年制大学への入学が困難ではないわが国における短大の存在意義は、ひとつに成人後早期に一定水準の教養を備えて、多種類の職業から自分に合った職業を身につけて実社会に出ることが可能なことである。経済的要素や現実的な職業の選択肢があることも短大の意義のひとつである。

仙台青葉学院短期大学は、「豊かな人間性を育てる教養教育」、「良好な人間関係を築く対人教育」、そして、「地域社会に貢献し得る実学教育」という三本柱の建学精神のもとに7年前に創立された。このような建学の精神は、現代の実社会でも求められているものであり、そのなかで活動するものにとっても大切な精神である。5年前の東日本大震災数年後の余燼と混乱と復興という未だ厳しい社会環境の時期に実学を学ぶために青葉学院短大を選んで入学し、今春卒業した諸兄姉の今後にはとくに心を馳せたい。この諸兄姉の多くは今後、実社会のなかに身を投じ、それぞれの分野で必要な人材として実力を発揮して、それぞれの組織のなかで責任をもってその組織を支えていってもらいたい。

筆者は、社会人の生き方の基本のひとつとして、この現代社会は自由ではあるが、同時に責任を持たなければ仲間に入れてもらえないような社会であるということを常々思い考えてきた。この“Freedom and Responsibility”という言葉は、自分自身の半世紀以上前の高等学校時代に教えられて以来、心のなかに常にはっきりと存在するようになった。組織のなかで働く者はまず、技術的能力が要求される。そして、人間的能力という、たとえば、コミュニケーション能力や、人と協力する能力や、他人の心を理解できるような能力などを備えた人物が必要とされる。そのうえで、考える、あるいは着想する能力という、組織の将来構想を考えたり、運営したりする能力があるような人物に成長するのである。

これまで述べてきたような基本的な必要能力を別な言葉でいうと、組織の新人として望ましい人物には少なくとも三つの要件が必要である。一つ目は、「達成したいという目的があること」。二つ目は、「組織構成員と協力しあう意識があること」。三つ目は、「組織のなかで挫折しないで、我慢づよく生活していくという心構えをもつこと」である。

組織の新人として社会に出るときの心構えに加えて、新人として自分自身をこれからも大切にすることに心がけるのはいうまでもない。自分自身のQOL―クオリティー　オブ　ライフ

ー、つまり「生活の質」を満足させるように努力してほしいのである。QOLの一番上にあるものは、生きがいである。自分自身で自分の将来の夢をつくり、その実現に努力してほしい。

新しく社会に旅立つ諸兄姉に短大学長として送りたい気持ちを述べた。